
仮面ライダーテストメント

斎藤一樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーテストメント

【Nコード】

N1932Z

【作者名】

斎藤一樹

【あらすじ】

「こんなのってねえよ……。こんな終わり方、認められるかよ……ッ！」

力無き少年は、神に力を求める。

「誰か……私たちを助けて……！」

その力はただ、大切な者達を護るが為に。

「…なら、俺が守る。そのための力も、ここにある！」

そして、神と契約した少年は、

「…変、身ッ！」

今、英雄^{ヒーロー}となる。

プロローグ（前書き）

どうも、斎藤一樹です。

取り敢えず予告編として、プロローグをのせました。本当に書くかどうかは分かりません。読みたい、という方はコメント欄に「読みたい」と書いて送って下さい。
それではどうぞ。

ブローグ

ブローグ

「…こんなのってねえよ……。こんな終わり方、認められるかよ…
…ッ！」

力無き少年は、神に力を求める。

「誰か……私たちを助けて……！」

その力はただ、大切な者達を護るが為に。

「…なら、俺が守る。そのための力も、ここにある！」

そして、神と契約した少年は、

「…変、身ッ！」

今、英雄ヒーローとなる。

その力は、唯、守るために。

大切な者を、愛しき者を、その手で守るが為に。

「さて、そろそろ終わりにしようか」

… P i ……

「神との契約の元に、罪人に裁きを」

T e s t a m e n t C l i m a x !

「アーン」

その名は、 仮面ライダー テスタメント 。

プロローグ（後書き）

面白そうだと思っていただけ、続きを読みたいと思って頂けましたら、感想で「続きを読みたい」と書いて送って下さい。

もしくは、100PVを突破したら書き始めようかな、と。

読者の皆様に掛かっています。

Episode・01 邂逅（前書き）

ども、期末テスト期間真っ最中の斎藤一樹です。

相変わらず不定期更新の予定ですが、よろしくお願いします！

Episode・01 邂逅

いつも通りの日常が、実はとつくの昔にその姿を変えていたら。そしてその事を知らずに日々を過ごして、ある日突然その事実を突き付けられたなら。皆さんはどうしますか？

あ、どうも、初めまして。私、柊真帆ひいらぎまほと言います。えっと、高校生です。今、目の前で、信じられないような事が繰り広げられています。

私の目の前に突然不気味なバケモノが姿を現し、周囲にいた人々を無差別に襲いだしたのです。ああ、また一人、ソイツの缺のような右腕に腹部を貫かれて、どさりと、地面に倒れ伏しました。

私は、そのバケモノが現れた時に腰を抜かしてしまい、動くことができません。周りにいた人は我先に、と既にいなくなってしまう。後には私と既に動かなくなった数人の方々だけが残されています。助けに来た警察の方も、既に冷たくなられています。

常時であれば吐き気をもたらずであろうその光景に、しかしどこか麻痺してしまっているらしい今の私は、何も感じることはありません。

パニックに陥っているにもかかわらず、私の中のどこか冷静な部分「もう助かる事は無い」と、客観的な事実を他ならぬ私に突き付けています。そして、一步、また一步と、そいつは近づいてきます。そして、何人もの方々を殺めたその右腕を振り上げました。私

は、本能的に目をぎゅっ、ときつく閉じました。これ以上、この悪夢のような光景を見ないで済むように、と。

今更悔やんでもどうともならないと知りながらも、よりにも寄って今日に限って寄り道をしてしまった自分の事を恨まずには居られません。そして、かつて幼いころに見たヒーローを思い浮かべ、叶わないと分かっているにもかかわらず助けを求めました。

――私を、助けて。この悪夢から、連れ出して、と。

そういえば。なぜ、私はいま、こうして考え事をする事ができるのでしょうか。言葉を換えるのなら、なぜ私は未だ生きているのでしょうか？

恐る恐る、私は固く閉じていた目を開きます。そして、見ました。私に背を向け、振り下ろされているアイツの凶器うでを手を持った鞆ブレイザーで受け止めている、学生服を着た、私と同じぐらいの年頃の男性の姿を。

私に背を向けたまま、その方が私に声をかけます。

「よう、お嬢さん。ケガは無いかい？」

こんな状況だというのに、どこか笑みを誘うような、おどけた声。私は驚きのあまり声が出せず、首を縦に振ることでそれに答えました。それが分かったのか、

「そりゃ良かった。悪いね、来るのが遅れちゃって。でも、もう大

丈夫だ。そこで見てな、すぐに終わらせるから」

平然と、そう言つてのけました。……アレと戦つて、勝つつもりなのでしょうか、彼は。警察の方でさえ、あっさりと殺されてしまったというのに。

「やめて下さい、無茶です！私の事は気にしないでいいですから、あなたは逃げてください！」

ほとんど悲鳴に近い声で私が言つても、

「あいにくそいつは、無理な相談つてやつだねえ」

例によつておどけた口調で返されてしまいました。未だ、彼はアイツの腕を受け止めたまま。

「何より、君のような……」

そこで彼は言葉を区切ると、バケモノのお腹を思いつきり蹴り飛ばしました。そしてこちらを振り向くと、ウインクして言いました。

「可愛い女の子を残して行けるわけ、無いだろ？」

……こ、こんな状況でこの人は……！いえ、こんな状況で頬を熱くさせている私が言えた事では無いのですが。

あまりの事に言葉が出てこず、口をぱくぱくとさせている私を可笑しそうに見てから、彼は私の隣でアイツに向き直りながら言いました。

「ま、そこで見てな。なあに、勝算の無い戦いはしないさ」

基本的には、ね。

そう小さく付け加えて、彼はポケットから機械のようなバックルを取り出して腰に当てました。すると、腰にあてたそのバックルからベルトが伸び、腰に巻きつきます。…あれは、一体……？そして、彼がそのバックルの右側に付いているスイッチの一つを押すと、Testament Stand by! という電子音声が流れ、エレキギターを掻き鳴らすようなメロディーが流れだしました。突如の事に私の頭はショート寸前です。

更に彼はポケットから新たにUSBメモリのような、また鍵のような形をしたものをベルト上部の穴に差し込むと、それを左に90度倒しました。すると、メロディーが鳴りやみ、代わりに今度はConnect という電子音声が鳴りました。そして、

「……変身ッ！」

という掛け声とともに眩い光が彼を包み、光が消えた後、彼の姿は、西洋の騎士を思わせる姿へと変わっていたのです。

Episode・02 日常からの乖離

胸部には十字架の紋章が刻まれた、騎士甲冑のような白銀の装甲を、黒いライダースーツのような物の上に身に纏い、頭部は十字架を模したバイザーの付いたフルフェイスのヘルメットを着けています。そして腰には、例のベルトが巻きついていきます。そして、バイザーの奥で、一瞬、目のような部分が薄く光りました。

不思議と、私はその姿に恐怖を感じませんでした。目の前で異形の存在へと変じたのにも関わらず。

そんな私をあのかげモノから庇うように前に立ち、彼は言いました。

「さあて、懺悔は済んだか？」

言うと、そのまま左腰の十字剣を抜き放ち、アイツに斬りかかりました。

それから数合打ち合い、そしてついにあいつの袂に剣を挟まれてしまいました。……やはり駄目なのか、そう思った時、彼はそいつの腹部に蹴りを入れました。

「グウウッ！」

うめき声を上げ、後ろによるめいたそいつに、彼はベルトの背中側のホルスターから銃を取り出し、そいつに連射しました。銃弾を受け、身体のあるところから煙を上げながらそいつは吹き飛びました。

「んじゃ、終わらせようかね」

そして、ベルトの右腰に付けられた箱から一本の……鍵？を取り出し、銃身後部の穴に斜めに差し込んで90度右に回転させ、鍵（暫定）を銃身と平行になるように傾けました。すると、銃本体から Shooter Climax！ という電子音声の流れ、それから銃身の前半分が上下に分かれました。

「神の名の下に、死の救済を」

そして、彼が右手を前に向けた半身になりながら引き鉄トリガーを引くと今度は Testament Full Blast Shoot ing！ という音と共に、先ほどまでの銃弾とは異なる眩いほどのエネルギーの塊が撃ち出されました。

そして相手に背を向け、手のひらでクルリとその銃を一回転させてからホルスターにしまいつつ、彼は呟きました。

「アーメン」

直後、あのバケモノの身体が爆発しました。そして、彼は腰が抜けて立てない私に手を差し伸べました。爆発を背に、こちらに手を差し伸べるその姿は、まさしく幼い頃に見、そして憧れた正義のヒーローそのものでした。そう、確かあのヒーローの名は……

「……仮面、ライダー……」

助け起こされつつ小さく呟いた私に、その呟きが聞こえていたのか、彼はバツクルから鍵を抜き取りながら言いました。

「んじゃあ改めて。俺はあかひきこしゅすけ明月康介、……仮面ライダーテストメントだ。よろしくな、柊」

変身が解除され、康介さんの顔が露になります。なかなかハンサムです。

「あ、はい」

慌てて返事をしました。……あれ？ところで私、康介さんに名乗りましたっけ？

そんな事を思っていると、

「じゃあな、お嬢さん」

彼はひらひらと手を振り、歩き去っていきました。

「あ、ちょっと……………」

待って下さい、と言う前に、既に康介さんの後ろ姿はどこにも見えなくなっていました。そう、どこにも。

そして私は今更になって、康介さんが着ていた学生服が私の通う学校のものだった、と気が付いたのでした。

彼の姿、声を思い浮かべるだけで、不思議な事に胸が高鳴ります。私は一体、どうしてしまったのでしょうか……？こんな事、今まで一

度も無かったのに。

Episode・02 日常からの乖離（後書き）

ここでやっと一区切りです。

どうも、最近またWにハマり出した斎藤一樹です。にじファン（NOS）の仮面ライダーW×魔法少女リリカルなのはの作品を二つぐらい読んで、「仮面ライダージョーカーかつこいい……」と思いました。

ところで、テストメントの変身時の「エレキギターを掻き鳴らすような」メロディー、私の脳内イメージでは Girls Dead Monster の Shine Days という曲の、前奏部分をイメージして書いてます。ええ、私の趣味ですが何か（聞き直り）。興味のある方は YouTubeとかで検索を。

それでは、またお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1932z/>

仮面ライダーテストメント

2011年12月11日12時52分発行